

夏の幼年童謡の中より(上)

葛原 し げ る

『幼児の教育』に又何か書きこの御達し。何でも書きませんが、何が宜しいでせうか、問ひに大塚の新校舎へ寄りましたら、何でも心まかせに、このこと。それに却つて困つて、さて何善けむ、と數日は考へてみまして、『童謡四季』にも題して、四季折々向の童謡のこゝでも書かして頂きましたら、實際保育に當つてをられる方々の御参考にもなりませうか、拙作の中を涉獵してみます、意外に、夏季向のものゝ多いのに驚いてをります。一體、夏は、自然界の物みなが繁茂し、繁殖するまき、そして、人間も、家の中に引籠らないで、自然界に接する機會の多い時、殊に、子供は、一日中、外で遊びたがる時、遊ばせたい時、自然觀賞に最も好都合な時——私も、よく外で遊んで大きくなりましたから、夏季のものが多かったです。今年、私も、童謡作詩生活の二十五年目に當るさうです。その二十五年間に、幼児向に作曲付で發表しましたものゝ中から、少しづつ引用してみませう。他の作家諸君のも引用すれば、最も善いのですが、近年、著作権なきゝ六かしい事がありまして、轉載なき遠慮しなくてはならないのですから、少し、氣が引けますが、拙作のみになりますことを、御諒承願ひます。

*

*

*

*

「夏が来た」に感ずるのは、まづ何によりますか。都鄙の別なく、道ゆく人のバラソルからか、子供のストッキングが短くなるからか。それとも、氣早の青年の麥藁帽からか。十數年前、ふも、

「もう、夏ですな」

ミ、人から話しかけられたのは、その人が、燕のミぶのを目の前に見た時のこと。まことや、燕の翅に、夏は乗つて來るのでせうか、風も心地よく。

これは、はや、二十年もの昔の作ですが、思ひ切つて、「急行列車」だの「一目散」だのこいひ、「第一等」さへいひました。

由來、鐵橋を「くろがねのはし」こいふのが却つて六かしいのであり、「はまへ」こいふより「海岸」こいつの方が、幼児にも、正しく、明かに了解される様に、他に、適當な詞はないのです——「急行列車」、「一目散」、そして、「第一等」。かの「飛行機」に至つては、全然、他の語を求め餘地ありません。

かくて、第一節では、燕の飛翔の非常に速いこをいひ、第二節では、燕の形態の描寫もしておきました。

「翅は黒くて 黒光り

お腹は白くて 雪のやう」

こは、こを翹してゐますが、光澤のある事、腹の白い事だけは、見落してならない點であります。又、

「尻尾は二つに割れてゐる」

も、他の何鳥にもない特色ですから、此の童謡を、幼時から、理窟なしに覚えしめ得ますならば、小學校の博物に於ても

助かりませうし、また、「自然の神祕」を感じさすためにも、多少の役目を果すことが出来ませう。
さて、その結句の、

「燕はほんきに速い鳥」

は、をかしいですね、何も、翅が黒く光つてゐて、お腹が白くて、尻尾が割れてゐるから、それだから、燕が、速いのはありません。此の表現では、「——割れてゐて、それで、ほんきに速い」「こいふ様にも聞えます。それは、却つて、割れてゐても、それでも——」「こいふべきではないでせうか。即ち

「——二つに割れてゐる」

こいふべきではないでせうか。さうしても、此の曲なら、無理もなく、歌へます。

つばめ 小松耕輔氏作曲

電信線に三四羽の

燕がこまつて チビくくく

何の話か チビくくく

見てゐる中にこび出した

急行列車か 飛行機か

古巢のおうちへ 一目散

燕の體は 小さらが

空をこびくく 第一等

翅は黒くて黒光り

お腹は白くて雪のやう

尻尾は二つに割れてゐて

燕はほんきに速い鳥

(「大正幼年唱歌」第五集)

夏の神祕は、夜の螢です、螢の光です。螢の熱を伴はない光です。科學の今の世に、こればかりは、人智の中々及ばぬ
さいふのですから、螢は、おぼつてゐます。あんな小さな蟲でありながら、靈長である三萬物に威張つてゐる人間を尻目
にかけて。日暮さへ來れば、

ピカリ、ピカリ

スーイ スーイ

です。ほんきに、不思議な夜の蟲です。

「一體、螢の飛ぶ様子を、スーイ スーイといったものは、他にないね」。

さいつて、ひびく、ほめて下さる方があります。何も、おほめには當りませんが、光つて、きえて、また光つて、きえる
間に、場所をかへて、必ず、スー、スーに進んでゐる様子は、さうしても、

スーイ スーイ

さいふ感じです。これを、誰かゞ、真似てゐたさいつて、何だか、その詩人が、私の特權を侵害したかの様に謂ふ方があ
るのですが、螢の飛び方は、暫らくおいて、あの光は、「ピカッ、ピカッ」、又は、「ピーカリ、ピーカリ」、でせう。その

「ピカ」は、誰の特権でもありません。同じく、「スーイ スーイ」さいふ表現も、天下のものです。それとも、特殊の謂ひ方でせうか、私は、一度、幼児をつれて、螢狩に行つて、幼児が何さいふか、心して聞いてゐて、何か、もつと善い表現の「ヒント」を得たいと望んでゐますが、東京生活三十年、いまだ一度も、螢狩に出かけた事がありません。

ほたる 小松耕輔氏作曲

ピカリ ピカリ

スーイ スーイ

光つて

消えて

また光る

螢がこべば

おもしろい

ピカリ ピカリ

スーイ スーイ

(大正幼年唱歌「第二集」)

夏の自然界は、まごころに不思議づくめです。あ、蝸牛は何うです。自分の家を自分の脊中に脊負つて、引越すのも愉快だし、殊に、長い柄のついた眼を、振り廻しながら匍つて行くぜ、いたくは、他の何にもないごころです。(いえ、只一つ、蟹がりましたね。柄のついた眼の持主は)しかし、蟹のあわてん坊さ違つて、蝸牛の、悠々迫らず敢て急がず、下に居れ、下に居れ、そこからあたりに、無禮者がゐないかさばかり、探照燈を、右に、左に、高々さ揚げて、前面左右を照らすさ

ばかり、乙に構へて、ぢりり、ぢりりミ匍つて行く豊かな態度さいふ中にも、眼の柄の伸縮屢々にして、後には、首まで縮めてしまつて、更に、外敵去らずミみれば、斷然、決心して、家諸共に、地球の引力のまにく、引かれて、轉んで落ちて行く英斷力の憎いほきであるではありませんか。白状しますが、私は、大きな藪を北に脊負つた古い屋敷の家に生れて大きくなりましたので、よく蝸牛ミ遊びました。長い塀の筒瓦の上を、匍つて行く蝸牛を發見するや、いろくゝの惡戯をして、だまつて、一人で遊んでをりました。いえ、蝸牛君ミ二人で、です。時には、母の裁縫箱から、鉄を持ち出して、蝸牛の眼玉の長柄を、手速く、チョコキンミ切つたこきも、一匹や、三匹ではありません。のち、罪深い兒は、母に吐られて、吐られて、「生きてゐる蝸牛の眼を切るこは―」ミ、ひきく吐られて、

「死んだ蝸牛は、角を出して呉れんがな」ミいつた私でした。お許し下さい。近頃は、絶対に、そんな事はしてをりませんから。

かたつむり

小松耕輔氏作曲

お庭の隅の かたつむり

眠つてゐるかミ思つたら

貝の家から ぬけ出して

獨 で靜かに 匍ひ出した

お家を脊負つて 匍ひ出した

ここへ行くのか かたつむり

頭の先には 知らぬ間に

二本の 長い角が出て

角の先には 目があつて

見まはしながら はつて行く

角は のびたり ちよんだり

目は かくれたり 出て來たり

(「大正幼年唱歌」第五集)

次のは蝸牛に同情してゐるのです。決して、角を切つてやるから、そら出せ、やれ出せといつてゐるのではありません。
ん。

「おなかゞ すいたら 何をやる」

こまで、いつて、苦心してゐるのですから、さうぞ、私の昔の、やんちやをお許し下さい。

いそげよ でで蟲

小松耕輔氏作曲

急げよ でで蟲

日が暮れる

せい出せ 角出せ 力出せ

お家を せおつて 唯一人

ここまで行くのか

引越しに

すべるな 高いぞ

竹の垣

結び目 縄目に つまづくな

てうちん かさうか 灯をやるか

おなかゞ すいたら

何をやる

(お山の細みち「より)

夏の世界に、幼児の友として、春のおたまじやくしと同じく、「かへる」がります。圖らざる時、圖らざる場所に、一匹の蛙が両手をつけてゐるのです。それは、暮は違つて、さつきから、ついてゐる両手ではないのです。ピョーンと、全力をあげて、幅飛をするやうにジャンプして、そして、次のジャンプをする前に、少しく、方向が不安なのか、時々眼玉を、くりくさせては、考へる様子です。しかし、これは、棲家である何處かのお池をさして、歸つて行く途上なのです。

近頃、この第一節の第三行第四行の初

「かへる、かへつて——」

の「かへる」が、問題になりました。「蛙」でなくて「歸る」を考へられて困りましたから、假名で書かないことにしました。

かへる

一つきんでは 両手について

何か考へ 考へながら

蛙　ぎこまで　歸つて行くか

蛙　かへつて　何して遊ぶ

池へ歸つて　游いで遊ぶ

池は私の　生れたところ

池の友達　遊びが上手

池へ歸つて　皆ぞ遊ぶ

(「大正幼年唱歌」第二集)

蛙の聲は、いろいろに聞えますし、また、事實、いろいろの鳴き方もし、いろいろ違つたのもありますが、生まれ、蛙の群の夜の聲は喧しいことです。騒々しいといへば、私は、先年、鹿兒島のさる講習會で、大きい旅館の別邸に泊められて、その泉水に、蛙の一族がゐて、しかも、夜一夜、一家總出の大喧嘩でもやらかしてゐるかの様に、枕下で、鳴きつづけられて、閉口した事があります。全く以て、「ゲゲゲのグググ」。「ゲゲゲのグググ」。何時間たつても、「ゲゲゲのグググ」なのです。こちらは、蚊帳の中で、「ゲゲゲのグググ」。「ぎこ」か、はんもんして苦しんでゐることも知らず、夜明になつても、蛙家一族は、よくも疲れず、「ゲゲゲのグググ」——それが止んだ頃には、夜が明けてゐて、私は、講習會からの迎車に乗らねばならぬ時が近いのでした。きつこ、あれは蛙の母さんが、子供蛙に約束の土産を、途中で食つてしまつたので、親子で、喧嘩でも初まつたのでせうか。

ゲゲゲのグググ

小松耕輔氏作曲

蛙　ヒヨコ　ヒヨコ

一二三　コ　三三三　コ

四ヒヨコ 五ヒヨコ

六七ヒヨコ

八ヒヨコ やつこらさこ

お池に もごりや

池ちや 子蛙 ゲゲゲのゲゲゲ

お土産 何こ ゲゲゲのゲゲゲ

頭 ヒヨコ／＼ ゲゲゲのゲゲゲ

またも ヒヨコ ヒヨコ

二ヒヨコ 三ヒヨコ

四ヒヨコ 五ヒヨコ

六七ヒヨコ

八ヒヨコ やつこらさこ

母さま蛙

土産や 途中で ゲゲゲのゲゲゲ

道が遠くて ゲゲゲのゲゲゲ

たべてしまつたミ ゲゲゲのゲゲゲ

(土筆と山羊)

月夜の蛙は、また、のんびりしてゐます。池に浮んだ月の影をみて—いかにも涼しそうに、影をうつした月のやさしさ

に、甘えた子蛙がお月様に、負んぶして頂きたくて、ざんぶさばかり、お池にまびこみましたら、月の影は、きらり、きらり、砕けて、さて早くも空へ歸つてか、ニッコリ、ニッコリ。

「おーや、お月さんは、もう、あそびにー」を、蛙の子供は、いそ、のんびりしてゐます。

蛙の子ごも 小松耕輔氏作曲

蛙の子ごも

お月さんに おんぶ

お池に浮んだ

お月さんに おんぶ

お月さん 目がけて

お池に ざんぶ

空から お月さん

それ見て 笑ふ

こゝまで お出でこ

につこり 笑ふ

蛙は 空を見て

「お月さん 早いな」

(「お山の細みち」より)

夏の人間世界は、何をしてゐても暑いこゝです。何處にゐても暑い事です。それで、人間は、いろいろの工夫をこらし

て、涼しい氣持を味はひたがります。噴水も、夏は、その一つ。

この第二節の

「顔にあたつて—」

は、少し、あたりませんですね。

「顔に、か。か。か。つて—」

ではないのでせうか。

噴 水 梁田貞氏作曲

お池の噴水 おもしろい。

ひつきりなしに、水柱

しゆう、しゆう、しゆう、しゆう

高く上つて、おもしろい。

お池の噴水 すゞしいな。

風に吹かれて 霧の雨

さら、さら、さらり

顔にあたつて、すゞしいな。

(「大正幼年唱歌」第二集)

夏の學者は、蜘蛛です。蜘蛛は數學家です、測量家です。そして、建築家です。ほんまに、巢を張る蜘蛛の賢いさには驚かされます。ですから、私は、二十五年昔、「蜘蛛先生」を云ふのさへ作りました。

そして、網を張つた蜘蛛の家の真中に、ありつたけの脚を皆踏ん張つて、るばつてゐる蜘蛛は、何を氣取つてゐるのでせう。人間ならば王様氣取り、いえ、子供からいへば、王子様氣取り。

くもの王子

小松耕輔氏作曲

朝日がさして

きいら きら

五色の絲のハンモック

眠つて ゐるのか

王子様

八つ脚 ひろげた王子様

朝風吹けば

ゆうら ゆら

楽しい夢を 破られて

怒つてゐるのか

王子様

八つ脚ひろげた王子様

(「ケンく子雉」より)